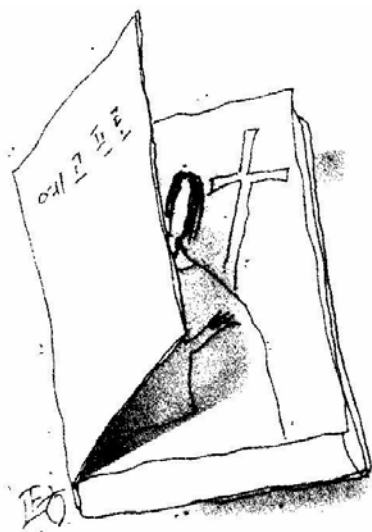


## 予告編と映画

### 第2編9章

キリストは律法のもとにあるユダヤ人たちにも予め知られていたが、最終的には福音において完全に啓示されました。



律法に簡略に、少しずつ予告されてきた神の栄光はキリストの内にだけ満ち満ちてあらわされました(コリント二3:31-18)。イエスが私たちのところに来られたことで昔、ヤコブに示されたはしごの実体が私たちに与えられて、イエスによって私たちのために完全に天の門が開かれたのです(創世記28:12、ヨハネ1:51)。

映画業者たちは映画の予告編を作ることに勢力を注いでいます。予告編は何よりも面白くなければなりません。その映画を是非見てみたいと誰にでも思わせるようにさせないとならないからです。しかも、予告編は分かりやすくなければなりません。その映画が何を語ろうとしているのか、それはどんな映画なのかを正確に示す必要があるのです。その映画が恋愛映画なのか、ホラー映画なのか、アクション映画なのか、SF映画なのか...という具合です。

さらに予告編は正確でなければなりません。予告編がどんなに面白くて、興味が持てるものであっても、それが本編の内容を誤って伝えているならば、観客の期待を裏切る結果になってしまいます。その点で予告編は何と言っても本編のテーマを正確に予告することができなければならないのです。人々は予告編を見て、本編についての期待感を抱くようになります。そしてその映画が上映される日を心待ちにするのです。人々は封切日に、映画を見て「ああ、予告編のあの場面はこれか!」と納得させられるのです。律法(旧約)はイエスの映画の予告編のようなものです。そして福音(新約)はまさにそのイエスの映

画そのものになるわけです。

第1節 キリストの恩寵は予め律法で告げられ、福音において完全にあらわされました。

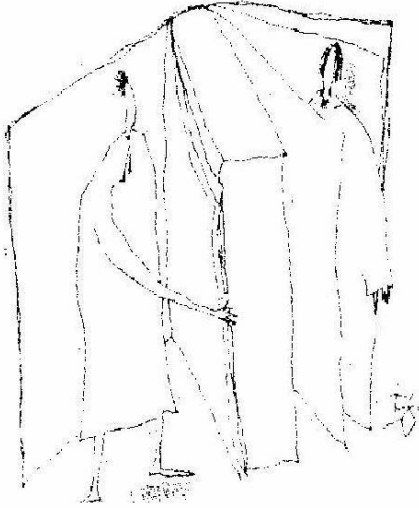
旧約時代の人々はイエスの映画の予告編を見て生きてきたことがはっきり分かります。律法の持っている様々な贖罪儀式と祭儀などはひとつの予告編であったと言えるからです。その予告編には今のような新約時代の私たちがはっきりと完全な形で見ているイエス・キリストの姿が、興味深く、ある程度の隠された形で表されているのです。預言者マラキと使徒ペトロの言葉を比較して見ると旧約と新約の関係が明らかになります。

マラキは自分が死んだ後に預言者の職責が中断するので、モーセの律法を熱心に守り続けるようにとユダヤ人に命じてから、義の太陽が昇ると宣言しています(マラキ 3:20)。これは何を語っているのでしょうか? 律法はユダヤ人の敬虔な者たちにキリストが来られることを期待して生きるように光を与えるものですが、やがてキリストが実際に来られたときにこの世界はさらに明るい光に照らし出されるようになるという意味です。

後になって使徒ペトロの言葉はこの言葉を次のように結びつけています。「この救いについては、あなたがたに与えられる恵みのことをあらかじめ語った預言者たちも、探求し、注意深く調べました。預言者たちは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光についてあらかじめ証しされた際、それがだれを、あるいは、どの時期を指すのか調べたのです。彼らは、それらのことが、自分たち(あるいは旧約時代の預言者たち)のためではなく、あなたがたのため(新約時代の聖徒たち)であるとの啓示を(福音を通じて)受けました。それらのことは、天から遣わされた聖霊に導かれて福音をあなたがたに告げ知らせた人たちが、今、あなたがたに告げ知らせており、天使たちも見て確かめたいと願っているものなのです」(ペトロ 1:10-12)。どうですか。旧約の預言者や民たちは宝物について語り、互いに教え合い、学びました。しかし、そのようにして彼らはその宝物を新約時代の民に伝達する役目を果たしたのです。

ですから新約時代の私たちは古い契約の民よりより一層大きく豊かな恵みの中に生かされているのです。ちょうど映画の予告編を見た人より本編を見た人のほうがより一層、喜んで楽しんでいるようなものです。イエスも弟子たちがその素晴らしい事実を悟るようにと願われ(ルカ 10:23,24; マタイ 13:16,17; ヨハネ 5:46、8:56)、使徒パウロも昔の時代の人々と比べることのできない光を私たちは心に受けていると証言しています(コリント 4:6)。ヘブライの信徒への手紙の著者はその点をはっきりと比較して語っています(ヘブライ 1:1-3)。ですから神の形とそのみ心がキリストの内に真昼のように明るみに出されているのですから、今のこの時代に生きている人々が神への感謝を忘れて不敬虔に生きているという事実は、昔の時代の不敬虔より一層深刻なものになるのです。

このように福音はイエス・キリストをはっきりとあらわしています。ついに映画の本編



が上映されたのです。もちろん広い意味で言えば、旧約時代の神の民に与えられた神の愛と義についての証言もみな福音の一部であると考えられます。しかし、さらに厳密な意味で見ると福音はキリストの内で明らかになった恩寵を宣布するものであると言えます。キリストと使徒たちはそのような意味で福音という言葉を使いました(マタイ 4 : 17、23、9 : 35 ; マルコ 1 : 1、テモテ 1 : 10)。

神のすべての約束はキリストの内で「はい」と「アーメン」として発見されるのです(コリント二 1 : 20、22)。そして律法に簡略に、少しずつ予

告されてきた神の栄光はキリストの内にだけ満ち満ちてあらわされたのです(コリント二 3 : 31-18)。イエスが私たちのところに来られたことで昔、ヤコブに示されたはしごの実体が私たちに与えられて、イエスによって私たちのために完全に天の門が開かれたのです(創世記 28 : 12、ヨハネ 1 : 51)。

## 第2節 律法と福音の関係を誤解してはなりません。

イエスが来られたことで私たちの救いに対するすべての事柄が成就しました。しかし、そうだとすも私たちがキリストから与えられたすべての恵みと祝福をすでにみな手にしているわけではありません。キリストはすべての律法の要求を満たしてくださいましたが、私たちはキリストではありません。私たちにはまだキリストを通して与えられた約束が完全には実現されていませんから、それを希望のうちに待っているのです(コロサイ 3 : 3,4 ; ローマ 8 : 24,25)。しかも私たちの敬虔はこの地上の生涯と来世のすべてを約束するものだ聖書は教えています(テモテ 4 : 8)。

次のみ言葉も私たちにまだ実現していないものがあることを証言しています。「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。御子にこの望みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます」(ヨハネ 3 : 2,3)。

私たちが持っている信仰も、旧約の聖徒たちが持っていた信仰もどちらもまったく同じものです。それはこのような信仰です。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました」(ヘブライ 11 : 2)。また、私たちが受けた約束も旧約の聖徒たちが受けた約束もみな全く同じもので

す（コリント二 6：16、7：1）。ただその質や性格に差があるだけなのです。つまり律法はその約束の模型であり、影でしたが、福音を確実に受け継がせ、指し示してきたのです。

ところで律法と福音は互いに相対立する点がありますが、それをあまりにも過大に見てはいけません。例をあげればある人は、律法は行いによる功績を主張し、福音は無代価の恵みを強調していると語ってその二つを対立させます。パウロにも同じような言い方をしているところがたくさんあるからです。パウロはいろいろなところで律法という言葉で「神が私たちに要求される完璧な義の基準」という意味で使っています。神はその基準を私たちに要求され、それを守れない人に怒りと裁きを与え、その基準からほんの少しでも外れる人に呪いを加えられると言うのです。

しかし、パウロがそのように恐ろしい言葉を語る場合はおもに神の恩寵を強調するときなのです。人はあまりにも弱く、悪に染まっているために律法を守ること、律法が提供している約束を受けることはできないと言うのです。人はただ神の恩寵によってだけ赦され、義人として受け入れていただけるのです（ローマ 3：21 以下；ガラテヤ 3：10）。このような意味で律法と福音を対立させたパウロの強調は正しいものであったと言えるのです。

しかし、福音は違った救いの方法を提供しているというまでに律法全体を攻撃しているわけではありません。むしろ、福音は律法が約束してきたすべてのものを確実に実現して、その影に実体を与えるものなのです。「律法と預言者は、ヨハネの時までである」（ルカ 16：16、マタイ 11：13）というみ言葉は律法時代の民が呪いを受けなければならなかったと言う意味ではなく、彼らが福音の光に照らされた状態からは遠いところにいたという事実を語ろうとしているのです。

従って福音はすべて信じる者に救いを与える神の力ですが（ローマ 1：16）、それは律法と預言者たちによって証言されてきたものなのです（ローマ 3：21、16：25,26）。予告編や本編は実は同じものを語っていますが、それを示している程度には差が大きくあるように、律法と福音の違いは啓示の明瞭性の差だと言うことができます。ですから、キリストの内であって私たちにはっきりと示された、その恩寵があまりにも豊かで大きいためイエスの降臨を通して天国がこの地上に建設されたと聖書は語っているのです（マタイ 1：28）。

### 第3節 洗礼のヨハネは律法と福音の間に立って、両者を結びつける預言者です

イエスの親類でもあった洗礼のヨハネは特別な人物でした。彼は律法と福音の間に立っていた預言者です。そのため彼は律法の最後の預言者でありながら、同時に福音の門を開いた最初の預言者でもあるのです。彼はキリストを世に紹介するときに「神の小羊」と言う言葉で表現することで福音の本質を明らかにしました（ヨハネ 1：29）。しかし、彼はこの後にイエスの復活によって明らかになった比べることもできないようなキリストの力と

栄光を示すことはできませんでした。

ですからイエスは彼を使徒たちと同じとは認めていません。「はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である」(マタイ 11:11)。この言葉の意味がその事実を示しています。イエスは洗礼のヨハネをすべての預言者よりも偉大であるが、福音を伝える(天国)者こそ最高の地位につくものだと言っているのです。

ヨハネは福音のイエスの先駆者であって(マラキ 3:23)、キリストのための弟子を準備した「燃えて輝くともし火」(ヨハネ 5:35)であって、キリストの道を準備した「荒れ野で叫ぶ声」(ヨハネ 1:23; 4:30)でした。しかしヨハネが始めたことはキリストが昇天後に、使徒たちによってついに完成されたのです。

### 結びの言葉

律法は福音の予告編です。そして福音は律法の本編映画のようなものです。ですから旧約は新約を待望させ、新約は旧約を理解できるようにさせるのです。律法の時代に生きた聖徒たちがちょうどともし火をかざして道を行く者たちとするなら、今、福音の内で生きている私たちは義の太陽が照らし出す道を行く人のようです。そうだとすれば私たちは旧約の民とは比べることのできない恵の世界に今、生きているということになるでしょう。